

最優秀賞

— 中学生以下の部 —

「私が数学を
好きになったきっかけ」

城下あかりさん

推し本：『浜村渚の計算ノート』

著：青柳碧人

推したい相手：数学が好きな人と、そうでない人に



審査員コメント



QuizKnock
伊沢拓司

個人的には、より学年が上の部門だったとしても上位に選ぶであろう作品だった。「推し文」である以上は「他人が読んだらどう思うか」の視点が必要であるが、本作はエピソードの選択やまとめ方にそうした客観性が窺え、かつ筆致も魅力的であった。

「私が数学を好きになったきっかけ」 城下あかり

あなたは、数学に対してどのような印象があるだろうか。学生時代の苦い思い出が蘇る、という大人や、数学が苦手・嫌いだという学生は少なくない。しかし、私は数学が大好きだ。私は数学の稀代の天才というわけではない。それでも私が数学を好きになったのは、小学生のときに会った小説、『浜村渚の計算ノート』がきっかけだった。舞台は義務教育から数学が排斥された日本。もう一度数学を取り戻そうとする人々で構成された数学テロ組織『黒い三角定規』が日本を恐怖に陥れる。数学を愛したテロリスト達の犯行を止めるために選ばれたのは、数学大好きっ娘な中学2年生・浜村渚、というこのエキセントリックなストーリーに、私は一気に引き込まれた。主人公の浜村渚は、とろんとした二重まぶたに低めの身長、周囲の人間に『美少女のタマゴ』と評される容姿の持ち主で、いわゆる「理系」というイメージとは少し異なっている。作者の青柳碧人先生は、『主人公は一挙一動が鼻につくようなガチンコ理系のやさ男などではなく、可愛い中学生の女の子のほうがいいというのは(少なくとも僕にとっては)当たり前のことでした』と語っている。その言葉通り浜村渚は親しみやすく、読者に愛される主人公だ。友達と喧嘩をしたり、恋バナをしたりする姿は等身大の中学2年生で、とてもテロを止めるほどの力があるとは思えない。しかし、数学を前にした彼女は人並み外れた数学愛を見せる。幼稚園の頃にはもう「ケーニヒスベルクの橋」について考えていたというのだから、彼女の数学愛は筋金入りだ。その愛情は、数学テロリストを前にしても決して揺るがな

い。歪んだ数学愛を語る数学テロリストに純粋な数学愛をもって立ち向かうその姿は、彼女の周囲と読者を魅了する。数学テロリストに勝るとも劣らない知識をもつ彼女は、数学を語るときに心の底から楽しそうに笑う。穏やかな口調で、中学・高校数学から数学上の未解決問題まで語ってみせ、数学オンチな周囲もいつのまにか引き込まれていく。ルート記号について『クイって曲がってるよ、カワイイじゃないですか』と力説する彼女にとって、数学はとても美しく、楽しく、可愛らしく、素敵な世界なのだろう。『浜村渚の計算ノート』を読んでいると、そんな世界をおすそわけしてもらったような気分になれる。ただ、当時小学生の私の理解力と知識では「数学」に追いつけない部分があり、当時の私は物語の一部を理解することを諦めてしまった。そして時は流れ、私は中学生になった。ついに「数学」が始まって、『浜村渚の計算ノート』で出てきた箇所が授業で出てくる。授業では、物語に出てきた解説よりもさらに詳しく、丁寧に学ぶことができた。小学生のときにはわからなかった部分が一気に理解出来るようになって、物語の謎と目の前の数式が一気に解けていく。まるで伏線回収のようなその爽快感から、私は数学の虜になった。『浜村渚の計算ノート』は数学がわからなくても楽しめるが、数学がわかっているほうが圧倒的に面白い。『浜村渚の計算ノート』の優れた点はそこだろう。『浜村渚の計算ノート』は解法などを全ては書かずに読者の好奇心を焚きつけることで、物語をより楽しませてくれる。もちろん数学の知識がある数学が好きな人なら、思わずあっと驚くような仕掛けをスムーズに読み取って楽しめるだろう。しかし、私はこの本を数学が好きではない人にこそ推したい。本を読む手を止めて、計算や作図をしてほしい。解けたときの達成感は、他の物語では味わえないものになるはずだ。浜村渚という数学少女のしている世界を、あなたにも見てほしい。すべての数学が好きな人と、すべてのそうでもない人へ。Have a nice math.